

もど子と人婦

號七第卷四第

新鬼が島征伐

やまとの翁

葦原村といふのは、日本のどの
 邊だか知りませぬが、先づその
 村に、年老った老翁と老嫗とが
 住んで居ます。この老夫婦は、
 餘程以前から代々ひきつゞいて

この村に住んで居るといふ話で、先祖といふのは、何でも、昔話にある桃太郎時代に居った人で、彼の猿蟹合戦の時などは、實地戦場に行つて觀戦した事もあると言つて居ります。

さて、此老翁と老嫗とは正直で、人が善いものですから、村中の人から大事にして可愛がられて居ました。そして、別にあり餘るといふ身代ではありませぬが、夫かといつて、貧乏といふ程でもなく、お老翁は、毎日山へ柴刈りに行くし、お老嫗さんは、川へ洗濯に行つたりして、楽しく二人で暮して居つたのですが、たつた一つの不足といふのは、二人の間に子供のないといふ事でありました。お老翁さんもお老嫗さんも、毎日朝、辨當持つて出かけて行つては、夕方歸つて來て、二人で面白く話などして、夕御飯

をお甘く頂くのですが、時々、「あゝ、子供を一人欲しいもんだな
あ」と、お老翁さんが、言ひ出すと、「そーですね」とお老嫗さんが
言つて、二人で、そつと歎息することがありました。

所が、ある日、大變な事が起りました。いつもの通りお老翁さん
は山へ行くし、お老嫗さんは、河へ行つて洗濯して居りますと、
向ふの方からして、夫はく大きな桃が流れてきました。そこで
お老嫗さんは、大層喜んで、

「オヤ／＼こんなに大きな桃が流れてきた、確か、昔／＼私の
先祖の嫗さんが、此川へ洗濯に來た時も、丁度こんな桃が流れて
來て、その桃の中から、あの桃太郎さんが生れて來たのだといふ
話を聞いて居るが、ひよつとかすると、夫と同じ様に、この中から

又赤兒が生れて來るかも知れない、どれ、早く持つて行つて、お老翁さんと、割つて見ましよう」

といつて、洗濯などは、大抵にして仕舞つて、其桃を大事に背負つて、急いで家へ歸りました。

間もなく、お老翁さんも山から歸つて來ましたから、お老嫗さんは、早速其桃を見せて、自分の考を話して見た所が、お老翁さんも、「なる程」ひょっとかすると、そんな事があるかも知れないな、待てよ、夫では切る前に、お湯も沸かして置かねばなるまい、盥も用意して置くがよいぞ」

「はい、夫は、前から、もうちゃんと用意して、何時、赤兒が出來ても、よい様にして居ます」

など言つて、もう丸で、人間が子を生む時の用意などして待ち構へて居ります。

「あ、あ、一つ切つて見ようかな」

「さあ、切つて見ましよう甘く切らないと、中の赤兒を怪我させては行けませぬよ」

「大丈夫、さあ、切るよ」

「いって、大きな桃を、二つに切り割つて見た所が、いきなり、」

「其中から」

「大日本帝國萬歲!!」

と叫びながら、出て來た者がある、其聲が餘り大きかったもんだから、二人の年寄は、吃驚したとはく桃の中から、雷で落ち



て來たのかと思つた位でしたが、やがて、氣を靜めて見て、二度

六

吃驚、話で聞いた桃太郎の面影をつくりの可愛いゝ赤兒が、兩手に國旗と軍艦旗とを、高くさし上げて、桃の中に、仁王立ちにつつ立つて居ります。

「おやまあ、こんな可愛いゝ赤さんが出ましたよ」

「おゝ、昔の桃太郎さん、そつく

りだ、夫に矢張り、同じ様に桃の中から出て來たのだから、ひよつとかすると、桃太郎さんの親類かも知れないよ

「ハイ、僕は、其昔話の桃太郎さんから、百代目の孫に當つて居る明治桃太郎といふ者です。先祖の桃太郎さんは、やつぱり、あなたの方の御先祖の拾った桃から生れましたが、其子孫の私が又、あなたの方に拾はれたといふのは、よほど深い因縁と見えます、どうか、先祖の桃太郎と同様、宜しく御願ひ致します」

など、赤兒と思つたのが、こんなに立派に挨拶など致しましたから、二人は、丸で煙に巻かれて仕舞ひました。併し、何しろ、昔話の桃太郎百代の孫といふ明治桃太郎が、出たのですから、老人夫婦の喜といつたらない位で、「まあ、お湯にでも這入って、ゆっくり、昔話でもしようじやないか」といふので、天から、明治桃太郎は、お湯に這入りましたが、さて、其晩の夕御飯の賑か

で面白かった事といったら、

先づ、お老嫗さんが、先祖のお嫗さんが川へ行つて拾つた桃の事やら、其中から桃太郎が出た事など昔話の儘に話すと、お老翁さんは、又桃太郎の豪かつた事から、とう／＼鬼か島を退治して、いろ／＼な寶物など土産にして歸つた事などを面白く話してどうか、明治桃太郎も、先祖に劣らぬ豪傑になつてくれと、嬉し涙に咽んで語りました。

明治桃太郎は、始終、にこ／＼して、二人の話を熱心に聞いて居ました。が、さて申しますには、

「あの、お老翁さんにお老嫗さん、先祖の桃太郎はお話の通り、鬼が島を征伐する爲めに出て來ましたが、實は僕も、其爲めに出

て來ました」

「ウシ、なる程、夫では今でも矢張り、そんな鬼が居るかの」

「ハイ、おりますとも、あの時征伐した鬼どもは一旦降参しまし

たが、此頃、彼等の子孫の鬼どもが、新鬼が島に居ってまたく

惡戯を始めて、人民を困らせたり、他人の國を略取って占領しよ

うとして居ます、ですから、僕は、も一度、彼等を征伐しようと思

つて、出かけて來たのです」。

「なる程、夫は豪い、然し、そう聞くと、新鬼が島といふのは、

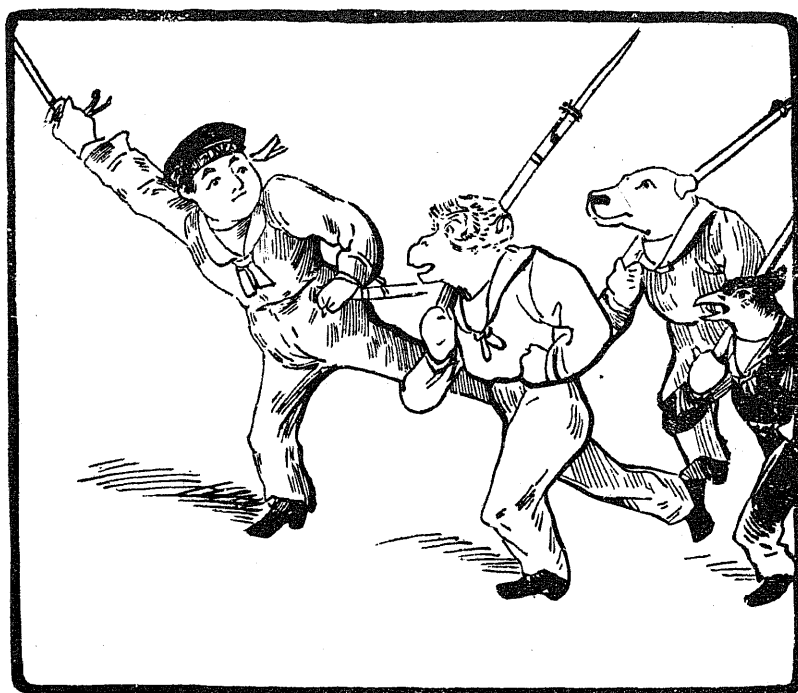
餘程大きなもので、又、昔話の時と違つて、世の中も進歩してる

から、武器なども、大層文明の利器を應用して居るだらうで、中

々ちよいとでは、征伐が出來まいの

鎮ハイ、夫は鬼の方も、中々發達して居まして、先祖の時は、海軍などはなかったですが、今では、陸軍と共に海軍も、よほど整備して、軍艦にも、一万五千噸といふ戦闘艦や、夫に巡洋艦、驅逐艦、水雷艇など随分備はって居ます、尙、近頃、又潜航水雷艇といつて、水中を潜つて來て敵艦を攻撃するのも出來たといふ事です、陸軍も、随分鬼數が揃つていて、其陣屋は、鐵條網だの、地雷火だの塹壕だの、いろいろ防備をしてる相です、併しそんなものは、何でもなからうと思ひます、今にすっかり降参させて御覽に入れます。

老人二人は、この話で、又吃驚しました、たつた今出て來た許りの赤兒と思つたにこんな豪い話をするもんですから、全く神様が



人間の形になって降來して
 來たのだと思ひまして、之
 からは、一層大事にして育
 てようと思ひました。
 さて、其中に、だんく月
 日もたち、明治桃太郎一日
 く大きな立派な身體に
 なりました。そして、毎日
 隙さへあれば家の斑犬を連
 れて行って山へ遊びに行く、
 すると其山に住んでゐる大猿

や雉^きなどが出て来て、そこで四人一所^{ばんしよ}になつて遊^{あそ}んだり、又^{また}は戦^{いくさ}争^{そう}の稽古^{けいこ}などして日を暮^くらして居^ゐりました。

そうして居^ゐる中に、彼^かの新鬼^{しんき}が島^{しま}の亂暴^{らんぼう}は、ますく甚^{はな}しくなつて、遂^{つい}にはこの葦原村^{あしはらむら}をも略取^{りやく}らうといふ企^{くは}てをする様^{よう}になりましたから、明治^{めいし}桃太郎^{ももたろう}は、もう承知^{しやうち}しません斷然^{だんぜん}決心^{けつしん}を致^{いた}しまして、或日^{あるひ}のこと、老人夫婦^{らうじんふうふ}の前^{まへ}に出^でまして、

「さて、お老翁^{らうじ}さんにお老嫗^{らうに}さん、永々^{なが}お世話^{せわ}になりましたが、いよく近日^{きんじつ}出發^{しつぱつ}致^{いた}しまして、かねてのお話^{はなし}の通り新鬼^{しんき}が島^{しま}征伐^{せいばつ}に出^でかけようと存^{ぞん}じます」

すると、お老翁^{らうじ}さんは「あゝそうか、いよく出^でかけるかの、しかし、其方^{そち}獨^{ひとり}りか、又^{また}いろいろの作戦^{さくせん}計^{けい}劃^{かく}は出^で來^きて居^ゐるかの、し

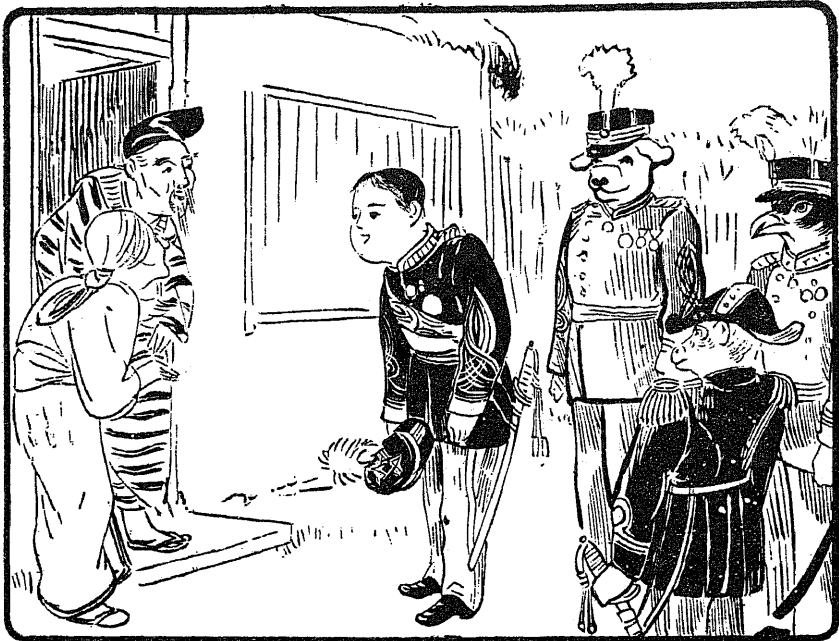
桃ハイ、家來には、先祖の桃太郎が従へました通り、犬と猿と雉との三匹が、めい／＼眷屬を引き連れて來る事に相談が決りまして、尤も、其中、猿は海軍の方の勤務に當りまして、他の二匹は、私が指圖して陸軍を組織します、ハイ、大砲の様なものも、すっかり整うて居ります、夫から、これは特別に、お老嫗さんにお願致したいのですが……

「あゝ／＼、何ので用かの

桃ハイ、その糧食の一件なので、これは、矢張り、日本一の黍園子をこしらへて頂きたいので、

題あり、宜しいとも、すぐにこしらへますよ

さあ、夫から大騒ぎになった、お老嫗さんは、急に近所の人を呼



ひ集めて来て、皆で其晩から、
 一生懸命になって、黍団子をこ
 しらへる、お老翁さんは、餓別
 にとて先祖傳來の銘刀を磨き立
 て、夫をサーベルにこしらへ直
 して居る
 夫から、四五日たつと、もう、
 すっかり用意が出来ました。い
 よく出發といふ日になります
 と、明治桃太郎は、陸軍大將の
 軍服を着けて夫に出ますと、犬

と雉^きとは、陸軍^{りくぐん}將校^{しやうこう}の服裝^{ふくそう}で、猿^{さる}が海軍^{かいぐん}將校^{しやうこう}の服^{ふく}を着^きけて、ちや

ーんと、其處^{そこ}に并^{なら}んで居^ゐます。

桃^{もも}夫^{それ}では、お老翁^{らうじ}さんに、お老嫗^{らうげん}さん、どうか、御機嫌^{ごきげん}よろしう、ちき近い中^{うち}に、凱旋^{がいせん}しますから、

二人^{ふたり}どうか、目出度^{めでた}う、凱旋^{がいせん}の日^ひを待^{まち}ちますよ、

そうして居^ゐる中^{うち}に、此^こ評判^{へいばん}を聞^ききつけて、村^{むら}の人等^{ひとら}はいろくな旗^{はた}など立^たてて、見送^{みおく}りに來^きまして、皆^{みな}一齊^{いっせい}に、

「明治^{めいし}桃太郎^{たうたろう}君^{くん}萬歲^{ばんざい}、陸海軍^{りくかいぐん}萬歲^{ばんざい}！」

さて、明治^{めいし}桃太郎^{たうたろう}將軍^{しやうぐん}は、三匹^{ひき}の將校^{しやうこう}を引^ひきつれて、そこを出^でて村^{むら}の港^{みなと}まで來^きますと、そこにはちゃんと、〇〇隻^{せき}の軍艦^{かんかん}が揃^{そろ}うて待^{まち}つて居^ゐる、夫^{それ}に〇隻^{せき}の大運送船^{たいうんそうせん}には、犬^{いぬ}と雉^きの眷屬^{けんぞく}約^{やく}〇個^こ師團^{しだん}

が乗り込んで、一令の下に、今にも出發しようとする意して居ります。そこで、桃太郎將軍は、三匹の將校に命じて、今車で積んで來た、日本一の黍團子を、戦争中の糧食にといふので、一つく各兵士に配らせました。

さて、いよく明治廿七年六月〇日の午砲を合圖に、海陸の大軍は此港を出航しました。折しも嚙喰たる海軍や樂隊が聞えますと運送船の陸兵等は、一齊に唱ひ出しました。

桃から生れた桃太郎　氣はやさしくて力持
鬼が島をば伐たんとて　勇んで家を出かけたり

所で一方新鬼が島に於ても、前申した様に、いろく隣國を取た

り、其人民を苦しめたりして得意がって居ました所が、いよく
今度日本の葦原村から昔話の桃太郎百代の孫、明治桃太郎將軍の
下に、犬猿雉の、眷屬ども、海陸兩軍に分れて攻めよせるといふ
電報を見て、大層吃驚しました、先祖の桃太郎の爲めには、吾々
の先祖も随分ひどくやられたが、其子孫といふのなら、きつと強
いに違ない、新しい學問もしてゐるに違ない、といつて、戦争し
ないで降参する譯にも行かないし、などいつて、いろ／＼軍議を
こらしましたが、何しろ幾らつよいといつても、軍勢などは少い
のだから、十分の防備さへして置けば攻めて來ても大丈夫といふ
ので、夫からといふものは、夜を日についで、防備はとりかゝり
ました。

即ち、軍港の入口には、數知れぬ機械水雷を敷設して、敵艦の入り込めない様にし、各砲臺には、三十二インチ砲など幾つも備へ付けたたり、脊面防禦としては、一面に地雷火を埋め、其上、幾重にも鐵條網をはりつけて、敵の突貫に備へ、各所に塹壕をほりわつて、例令何十万人の敵の寄するとも、ひくともしない様に、嚴重の固めが出来ましたので、例令ば、今日の旅順口其儘 あつぱれ難攻不落の、要害となりました。

所が、或晩のこと、猿の艦隊は、明治桃太郎將軍の命令に由り、決死の猿士をよりすぐつて、決死隊を組織し、○隻の水雷艇に乗り込んで、敵の敷設水雷の間を潜り抜けて、港口深くへ這入り込み、油斷を見澄まし、魚形水雷を發射して、見事、敵の大戦艦を

轟沈させて、スリ、大變と狼狽て騒ぐ間に水雷艇隊は、些少の損害もなしに、無事に根據地まで歸航しました。

さあ、そうなると、新鬼が島では大恐慌を來しまして、夫からといふものは、殘の艦隊は、慄へ上って、仕舞って、港内深くとち籠ったなり、更に出て來るといふことがなくなりました。夫で、仕方なしに、猿の艦隊は、皆で揃って行って、其出口へ又機械水雷を敷設して、とう／＼敵の軍艦を全く封鎖して仕舞ひました。そこで、今度は、いよく陸軍の順番になりました、之より前に陸軍の運送船は、既に海軍の掩護によりて、無事に某港へ上陸して、専ら攻撃についての作戰計畫を定めて居ましたが、もう、敵の軍艦も全く封鎖されたのですから、明治桃太郎將軍は、犬と雉

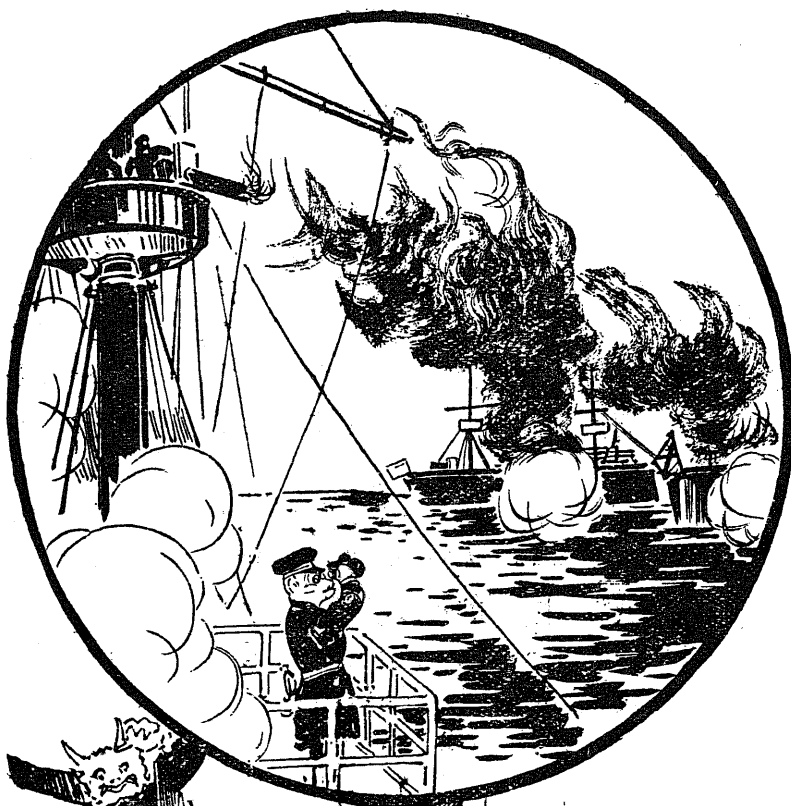
との。○個師團に向つて、一時に總攻撃の命令を傳へました。すると、大軍恰も潮の湧くが如くに敵陣目かけて進みましたが、中にも雉の大部は、砲兵の任務に當つて、後方の高い所に砲兵陣地を布き、こゝからして、敵の陣營に向つて、頻に猛烈の射撃をやつて、同時に、我が歩兵の犬軍を掩護して居ますと、歩兵の犬軍はバラバラバラバラと連發銃をつゞけ撃ちにやつて居る。

明治桃太郎は、始終、軍の進行を観察て居ましたが、敵も、必死となつて、砲臺からは、しきりに機關砲をつゞけ撃ちにする、其上、敵の歩兵は彼の塹壕の中に、身體を隠して、其中から、しきりに我軍を射撃して、中々頑強な抵抗を試みて居るから、此儘では、到底、いつ陷るかも知れないと思つて居ると、恰もよし、港

口封鎖の任に當つて居た、猿の艦隊の一部隊が、こつちへ回つて來て、いきなり、敵の左翼面からして、有力な射撃を送りましたので、さしも頑強な敵も、是には大に閉口したと見えて諸砲臺は忽ち沈黙しました。此有様を見て、將軍は、「すわ、此機を外さず、敵陣に突貫せよ」と命令を下しますと、犬の總軍は、銃劍を提げて、ワーンと突貫する、雉の一部隊の工兵は、斧を振って鐵條網をたゝき切つてすぐ城門に迫つて、綿火藥を裝置して、いきなり、電氣をかけたから、城門は非常な大きな音をして爆發したから、明治桃太郎は、馬に鞭つて、眞先に進入すると、續いて犬軍ども、我もくと突貫したので、さしも頑強な敵も、とうくと白旗を上げて、茲に新鬼が島は全く降参しました。

そこで、明治桃太郎は、部下の將卒に休戦を命じ、自ら鬼の本陣に乗り込みますと、敵の大將の黒鬼は、部下の白鬼だの赤鬼だのを引き連れて、桃太郎の面前に出で、今迄の罪を謝し、之まで占領した地面は奇麗に隣國へ返して仕舞ひ、以後は決して、再び人の地面は取らないといふことを約束して、尙軍港内に封じ込められた





軍艦たの、砲臺に残つて居る大砲たのは、一切明治桃太郎に獻上した其上に、償金として百億圓をも納めるといふ條約を結びました。

そこで、明治桃太郎は、目出度く、葦原村に凱旋しますと、村では、大變な勢で、提灯行列やら、凱旋門をたてるやらで、大祝勝大歡迎會を舉行しましたが、天子様からは、特に金鵒勳章功一級を下さいました。之から桃太郎は、家に歸つて、お老翁さん、お老嫗さんに孝行を盡して、一生、幸に暮しました。又隣國も、明治桃太郎のお蔭で、何れも、彼の殘虐な鬼の奪掠を免れて、平和を樂む事が出来る様になつて、大變に、桃太郎の恩義を感謝しましたとさ

めでたしく